

ポロニア, その歴史と現状

Polonia - Its History and Present State

石井哲士朗

はじめに

ポーランドを代表するロマン主義の作家・詩人たちアダム・ミツキェヴィチ, ユリウシュ・スウォヴァツキ, ツィプリアン・ノルヴィト, 作曲家フリデリック・ショパン, そして2度のノーベル賞に輝くマリア・スクウォドフスカ=キュリー, 彼らの共通点は何か, それは彼らがいずれも, ヨーロッパの政治地図から姿を消して久しい故国ポーランドを離れ, 安住の地と活躍の場を異郷に求めたことにある。

ある者はその詩行に自国の悲運を嘆き, ある者はその楽曲で母国への郷愁と連帯を謳い, またある者はその偉業を通して, 不正義と理不尽のはびこる祖国の現実に世界の目を向けさせた, 彼らはみな国を離れてもなお, あるいはむしろ国を離れたがゆえに, 熱烈な愛国者だった。

周知のように, 19世紀のポーランドは, 強国による分割支配の中で, ポーランド人の民族意識が社会階層を越えて強化され, 愛国精神が培われた時期であった。この時代, 多くのポーランド人が, 政治的弾圧と民族的抑圧を逃れて, 亡命を余儀なくさせられた。またこの時代には, 経済的困窮から故郷を捨て, 他国へ移住する者も出始めた。現在, 1千万人を越すとされる国外ポーランド人社会成立の端緒は, この時代に遡る。

本稿の目的は, ポロニアと称される国外ポーランド人社会が形成される歴史的経緯と, 現代世界に散在するポロニアの実態について, その概要を述べることにある。

1. ポロニアとは何か

まずポロニアの定義から始めよう。Poloniaは本来, 「ポーランド」を意味する中世ラテン語だが, 現代ポーランド語のpoloniaは, 「国外のポーランド人社会」を表わす普通名詞として広く使われている¹⁾。ここでは一般に理解されているように, 「ポロニアとはポーランドからの移民とその子孫から成る, ポーランド国外に定住し, その生地, 国籍, および日常使用する言語に関わりなく, ポーランドとの精神的・文化的連帯感を保持する人々の集団である」と定義しておく²⁾。

ここでいう「集団」の規模はさまざま, まずこの語をポーランド本国との対比において捉えるなら, ポロニアは国外に定住するポーランド人の総体を指す。次に「アメリカ合衆国のポ

ロニア」というように、ある国に住むすべてのポーランド人とポーランド系の人々を指す場合がある。さらに「シカゴのポロニア」、「テキサス州のパンナ・マリア村のポロニア」というような表現で、特定地域のポーランド人社会を示すこともある。

なお、実際には、上の定義から若干外れるケースも存在するが、これについては後述する。

2. ポロニア形成の要因と歴史的経緯

ポロニアはポーランドからの移民とその子孫によって成立した社会であるから、ポロニアの歴史はポーランドからの移民の歴史と密接に結びついている。そこでまず、移民の歴史、すなわちポーランド人の国外移住の歴史的経緯を概観しておこう³⁾。

Emigration (移民, 国外移住) という現象は、いろいろな視点からこれを捉えることができる。たとえば、政治的弾圧を逃れるための亡命、経済的困難から脱するための出稼ぎ、宗教的自由を求めての出国、といった動機による分類が考えられる。移住の期間を基準にすれば永久移住と一時的移住（たとえば戦争時の疎開、季節労働者の移住）が区別できる。さらに、強制的な移住（たとえば流刑、奴隷輸出）と自由意志に基づく移住の区別や、移住先による分類も可能であろう。

ポーランドの場合、移住の動機という観点から移民の歴史を辿るのがもっとも適切と思われる。というのも、この国には昔から、政治的理由による移民（亡命者）と経済的理由による移民（出稼ぎ移民）という2つの潮流が存在したからで、前者は後者に先行するが、移民の数の点では後者が圧倒している。

2-1. 政治移民の潮流

ポーランドで政治移民、すなわち政治的弾圧を恐れて国外へ出ることを決意した人々の歴史がいつごろ始まったかについては、いくつかの説がある。たとえば、1792年の戦争とタルゴヴィツァ連盟の勝利の後、ザクセンへ逃れた敗北派（いわゆる四年議会の主導勢力と愛国的将校からなる）を最初の移民と見る説がある⁴⁾。一方、もう少し時代を遡って、1768年のバール連盟に終結した士族（ポーランド語でシュラフタszlachta）たちの国外脱出をもってポーランドにおける政治移民の嚆矢とする見方もある⁵⁾。いずれにせよ、ロシア、プロイセン、オーストリアによるポーランド分割の前後に、これら外国勢力およびその協力者たちとの戦いに破れた人々が大量して国外へ脱出するようになった。早くも1760年代から1780年代に、ザクセン、フランス、トルコなどにポーランド移民の最初のコロニーが形成されている。コシチューシコ蜂起(1794)の失敗後は、パリが西欧におけるポーランド移民のセンターとなる。

こうして、蜂起の敗北、弾圧、大量移民の発生という、亡国の時代を通じて繰り返される政

治的社会的プロセスが始まった。

十一月蜂起(1830-31)の後、蜂起派の政治家や軍人が集団で国を去ったが、その数は8～9千人にのぼった。その4分の3は士族階級の出身だった。彼らは、祖国解放のための運動を今後どのように進めるべきかをめぐって、パリのHotel Lambertに本拠を構えた保守陣営と、ポーランド民主協会に結集した民主陣営に分れて論戦を展開した。このときの移民は、その規模の大きさと、のちの独立運動に及ぼした影響の大きさから、ポーランド史の中でWielka Emigracja(大移民、大亡命)と呼ばれるようになる。

一月蜂起(1863)の失敗はおよそ7千人の新たな移民の大群を生み出す。移住先もイギリス領の諸島、アルジェリア、ドイツ諸国家、ベルギー、スイス、イタリアへと広がる。

もちろん、蜂起の敗者のすべてが、自らの自由な意志で西欧諸国へ移住できたわけではない。反乱者として捕らえられ、分割国(主としてロシア)の辺境へ追放された者も少なくなかった。

2-2. 経済移民の潮流

19世紀中葉、政治移民とならんで、もうひとつの移民の潮流が出現する。それは経済移民とか、出稼ぎ移民と呼ばれる移住者たちで、この動きはまずプロイセン領ポーランドに現われる。

プロイセン東部ではすでに1830～1840年代にアメリカやオーストラリアへの集団移住が始まっていた。もっとも、この頃の移民の大半はドイツ人で、ポーランド人は少なかった。ポーランド人の出国が増えるのは1850年代である。そして19世紀の後半になると、農村の人口過剰の深刻化と飢餓の慢性化が進む中で、ポーランドからの移民が急増する。移民の多くはアメリカへ向かったが、世紀の変わり目になると移住先に変化が見られるようになる。すなわち、ドイツ工業の飛躍的な発展が、ポーランドの貧しい農村の余剰人口をドイツ中部と西部、とりわけルール鉱山地方に引き寄せる大きな要因となる。1872～1913年間にプロイセン領ポーランドを出国したおよそ120万のポーランド人のうち、アメリカ合衆国をはじめとする海外へ渡った者45～60万を差し引いて、残りのほとんどがドイツへ(その大半はルール地方へ)移住したと推定される。

ロシア領ポーランド(ポーランド王国)からの出稼ぎ移住は、プロイセン領よりやや遅れて1870年代に始まる。1914年までに推定で130～140万人が出国しているが、この中にはユダヤ人も含まれる。ここでも移民の最多グループをなすのは農民で、移住先は75%が北米に、10%が南米に、残りは他の欧州諸国へ向かった。ポーランド王国からはロシアへ移住した者も少なからずいたが(1910年頃の移民総数およそ40～60万)、こちらは労働者、職人、インテリ層が中心だった。

オーストリア領ポーランドからの移民は、そのほとんどがガリツィアの出身者だった。ハブ

スブルク帝国内の先進工業地帯への出稼ぎは、すでに19世紀中葉に始まっていたが、1870年頃よりアメリカ合衆国への、1890年代には南米への移住が盛んになり、移民の数は19世紀末から20世紀初めにかけて急増する。推定では、1914年までのガリツィアからの移民は、ウクライナ人とユダヤ人を含めた数字でおよそ100～110万、その80%以上の移住先は北米と南米で、残りの大半は帝国内の他の地域、ごく一部が他の欧州諸国へ向かった。

経済移民の規模を云々するさい見落としてならないのは、帰国者と季節移住者の存在である。帰国者がもっとも多かったのはアメリカ合衆国へ渡った移民のケースで、その数は今世紀初頭で移民総数の20～25%、つまり4～5人に1人が帰国したと推定されている。一方、季節労働者の出国先はドイツを筆頭とする欧州諸国で、たとえば1914年以前にオーストリア領およびロシア領ポーランドからドイツへ季節移住した者の数は、海外移住者の2倍に近かった。

2-3. 戦間期の移民

1918年、第一次世界大戦の終結とともにポーランドは念願の独立を回復し、国家再建の道を歩き始める。しかし、立ち後れた経済の復興は容易ではなく、仕事を求めて出国する人の波は途絶えることがなかった。それでも、アメリカがこの時期に中欧からの移民の入国を法的に制限する政策を採り始めたことも影響して、海外移住の数は著しく減る。戦間期の出国者総数は推定で200万人強。その3分の2が永住のための出国者で、3分の1は季節労働者。出国先は60%が欧州諸国、40%が海外。季節労働者の場合は欧州が主流。帰国者と季節労働者を差し引くと、戦間期の国外移住者の実数はおよそ95万人と推定される。

2-4. 第二次世界大戦期の出国

第二次大戦中の出国はこれ以前の移民とは異なって、ほとんどの場合、強制的性格をもつ。具体的には避難、疎開、強制立ち退き、強制移住、徴兵、徴用、強制収容所送りという形態をとった。

1939年9月の大戦勃発と九月戦役の直後に、12万5千～15万の難民がルーマニア、リトアニア、ラトヴィア、ハンガリーなどの近隣諸国へ脱出したが、そのおよそ4分の3は軍人だった。

戦時中、ポーランドからドイツやドイツ支配下の他の国々へ労働に駆り出され、ドイツ国防軍およびその他の組織へ強制的に組み込まれた者は280万人にのぼる。

このほか秘密裡に出国した者が1万数千人いたとされるが、彼らの多くはフランスへ逃れ、一部はさらにイギリスへ渡った。総勢3千人程度の小さな集団だったイギリスのポロニアは、戦中、戦後を通じておよそ25万人の難民が加わった結果、一変して欧州におけるポロニアの一大拠点になる。

大戦中は北米と南米にポーランドから直接移住するケースは少なく、たいていは第三国を介した間接移民であった。戦時中(終戦直後を含む)アメリカへ渡ったポーランド人は14万人、カナダは10万人、ブラジルへ3万3千人、アルゼンチンへ2万人と推定される。

第二次大戦中のソ連領内(1938年の国境による)には、およそ120万のポーランド国籍をもつ人々がいた。その中には、ドイツ軍の侵攻を前に避難した人々、1939~41年に東部国境地帯から強制移住させられた人々、赤軍に徴兵された人々、ソ連各地の工場へ徴用された人々がいた。彼らの一部およそ11万5千人は、1942年にアンデルス將軍に率いられてソ連領の外に出た。1万数千人の、主としてポーランド国籍をもつユダヤ人もソ連を出国した⁶⁾。一部のポーランド人は人民軍の兵士となってポーランド解放の戦列に加わった。

2-5. 第二次世界大戦後の出国

第二次大戦の終結後、ポーランドは新たな国境をもつことになった。これによってポーランドは東部領土の一部(リトアニア、西ウクライナ、西ベラルーシ)をソ連邦に譲る一方、北部(ポモージェ、ヴァルミア、マズールィ地方)と西部(ラウジッツ・ニサ川とオドラ川まで)の古い領土を回復した。国境の変更は空前の規模の人口移動をもたらした。戦後の移住は、新国境下のポーランドからの直接移住と、終戦を国境の外で迎えた人たちの間接移住に大別できる。

2-5-1. 直接移住

戦後まもなく、国際条約に基づく外国人(非ポーランド人)の引き揚げが行なわれた。すでに終戦の年だけで50万人近くのドイツ人が出国したと推定されるが、組織的な引き揚げが始まるのは翌1946年2月からで、1950年4月までにおよそ230万のドイツ人がオーデル・ナイセ(オドラ・ニサ)線を越えた。一方、ウクライナ人、ベラルーシ人、リトアニア人合わせて51万8千人が1946年8月までにソ連へ引き揚げた。さらに、ポーランド国籍をもつユダヤ人の多くも、自由意志によってポーランドを離れた。ユダヤ人の中には、ナチス統治下のポーランドで生き残った人々のほかに、ソ連からの引き揚げ者も含まれていた。推定によれば、1946年1月から1948年5月までに約10万、1949~1951年には約2万8千のユダヤ人が出国した。

このほかに、戦後この国に成立しつつあった社会主義的政治・経済・社会システムを嫌って出国した人々、航海に出たまま帰国しなかった船員、出稼ぎ移民などがいるが、その数は1950年までの出国者総数(404万9千人余り)の8分の1くらいと推定されている。

出国者の数はその後一時激減するが、これは国家再建のあらゆる分野で労働力が不足していたことと、東西両陣営の冷戦の続く状況下で、合法的な出国が厳しく制限されたためである。1955年からはGUS(国家統計局)の公式データが発表される。それによると、1955年から1980

年までの25年間に、永住のためポーランドを出国した者の総数は817,800人。このうち45%にあたる370,600人は1955～1960年の5年間に（さらにその3分の2は1957～1958年のいわゆる雪解け期に集中）、1961～1970年の10年間に212,500人、1971～1980年の10年間に225,700人が出国した。

2-5-2. 間接移住

次に間接移住の規模を見てみよう。PUR（国家引き揚げ局）のデータによれば、1946年6月の時点でポーランドの国外に、ポーランド国籍をもつ者（軍人をのぞく）がおよそ350万人いた。K.Kerstenの調査によると、オーストリアを含むドイツ帝国内にはおよそ250万人のポーランド市民がいた（ポーランド人は200万人で、残りの50万人は非ポーランド系）。このうち、オーデル・ナイセ線以東の地域に居住していた40万人余りは、自動的にポーランド国家の新しい国境内に入ったことになる。

一方、1945～1950年のポーランド人引き揚げ者は、ドイツからの164万人を筆頭に、ソ連から26万6千人、その他の欧州諸国から29万8千人など、合わせて241万人であった。

以上の数字から、戦後、故国へ帰らずに、滞在国に留まるか、あるいはさらに別の国に移住したポーランド人の数は60～80万くらいと推定される。

3. 現代のポロニア

世界に散在するポロニアの現状を概観するにあたって、ポロニアの概念の補足をおきたい。ポロニアとは2世紀にわたる移民の歴史を通じて、国外に成立したポーランド人社会であった。しかしながら、第一次および第二次世界大戦後の地政学的変化によって、具体的にはポーランド国家の国境の変更によって、原住ポーランド人の一部が、国境の外に取り残されることになった。現在ウクライナ、ベラルーシ、リトアニア、チェコ、およびスロヴァキアに住むポーランド人がこれにあたる。そこで本章では、前述の、ポロニアの由来を反映した定義を補足して、こうした原住ポーランド人社会も記述の対象に含めることにする。

A.Brożekによれば、現在、最大のポロニアはアメリカ合衆国にあり、次いで旧ソ連、フランス、ドイツ、ブラジル、カナダ、イギリス、オーストラリア、チェコおよびスロヴァキアと続く。以下、この順序で各国・地域のポロニアの起源と現状を略述する⁷⁾。

3-1. アメリカ合衆国

アメリカ合衆国へのポーランド人の集団移住が始まるのは19世紀後半で、1854年、上シロンスク（シレジア）出身の農民たちがテキサス州パンナ・マリア村に入植し、カトリック教区と

修道院と学校を備えた最初のポーランド人居留地を開設したことが記録されている⁹⁾。

その後、出稼ぎ移民の数は次第に増加し、第一次大戦前までに、帰国者をのぞく正味実数で210～230万のポーランド人がアメリカへ渡ったと推定される。今世紀初頭、ポーランドはアメリカへの入国者の数で、イタリアに次ぐ第2位をつねに占めていた。

ところが1920年代初め、アメリカが移民規制法を導入したことから、ポーランド移民の数が著しく減る。それでも1923～1939年の正味実数はおよそ12万6千人だった。

第二次大戦後は、トルーマン大統領の移民緩和政策によって入国者が一時的に急増し、年間割当枠で受け入れられた移民も含めて、1970年代初めまでに30万を越すポーランド人がアメリカ・ポロニアの新しいメンバーになった。

1980年の人口調査によると、自分を純粹のポーランド人 (single ancestry) であると回答した者3,805,740人、ポーランド系の混血 (multiple ancestry) と回答した者4,422,297人だった。したがってこの両者をポロニアの構成員とすれば、その規模はおよそ822万8千人になる。ちなみにこの前年に行なわれた無作為抽出法による別の調査の結果から概算すると、14歳以上のアメリカ国民のうちポーランド語を母語とする者は245万2千人であった。

3-2. 旧ソ連

現在、旧ソ連領内に存在するポロニアは、起源的には2つのグループに大別できる。ひとつは東部国境地帯(ポーランド語でKresy Wschodnie)、すなわち列強による分割以前と第二共和国の時代(1918-1939)にポーランドの国境内にあって、第二次大戦後はソ連に併合されることになった地域に住む原住ポーランド人たちであり、もうひとつは分割時代には帝政ロシア当局の、その後はソビエト政権の側からの政治的・民族的弾圧によって強制移住させられた人々である。この起源的相違はそれぞれのポロニアの地理的分布に反映されている。すなわち前者はウクライナ、ベラルーシ、リトアニアに、後者はロシア(とくに西シベリア低地)、カザフスタンに集中している。

第一次大戦前、ロシア帝国の版図(分割前にポーランド領だった部分をのぞく)にはおよそ50万のポーランド人が居住していたと推定されている。第一次大戦中、さらに100万人が強制疎開で、50万人がロシア軍兵士として、20万人がドイツ軍とオーストリア・ハンガリー軍の捕虜として帝国内へ移動させられるが、戦後、1918～1922年間に120万人がポーランドへ引き揚げている。1926年の人口調査によるソ連邦内のポーランド人は79万人弱だった。

戦間期の移住の中では、ウクライナのポーランド人の一部がカザフスタンへ強制移住させられたこと、ポーランドから当時独立国だったラトヴィアの農村へおよそ6万人が入植したことが注目される。

第二次大戦中の移住については2-4ですでに触れたが、1939～1941年間の強制移住と、独ソ戦の前線からの農民が含まれる。戦後、ポーランドへは1944～1950年間に約100万、1950年代後半に25万人弱が引き揚げている。

旧ソ連におけるポロニアの実状を1979年の人口調査の結果でみると、次のようになる。帰属民族をポーランドと答えた者は1,150,991人で、これは全人口の0.44%にあたる。このうちポーランド語を母語と答えた者は29.11%だった。

共和国ごとに見ると、ポーランド人の多い上位3国はベラルーシ（40万3千／共和国人口の4.2%）、ウクライナ（25万8千／同じく0.5%）、リトアニア（24万7千／同じく7.3%）の順。ところがポーランド語を母語と答えた者の割合はリトアニアがもっとも高く88.26%、次いでウクライナ14.14%、ベラルーシ7.75%とまったく逆の順序になる。リトアニアのポロニアの間でポーランド語の保持率が高いのは、旧ソ連では唯一この共和国だけに、ポーランド人が多数派を占める地区が存在していることと密接な関係がある。ウクライナでもリヴォフ（ポーランド名ルヴフ）県だけに限れば、母語の保持率は50%近い。

このほか1979年の人口調査でポーランド人を記録したのはロシア（99,800人）、ラトヴィア（62,600人）、カザフスタン（61,000人）、モルドヴァ（4,961人）、エストニア（2,897人）、グルジア（2,500人）の6共和国だった。

3-3. フランス

アメリカ、旧ソ連に次いで3番目の、そしてソ連が解体した現在、世界で2番目に大きなポロニアを抱える国はフランスである。

すでに述べたように、フランスは18世紀末以来ポーランドからの政治移民（亡命者）のセンターになっていたが、出稼ぎ移民が始まるのは19世紀末のことで、第一次大戦前にフランスで働くポーランド人は、農業と工業の両部門それぞれ8千～1万2千人程度だった。

ところが大戦終結後、1920年代になると、フランス政府が労働力不足を補うために、とくに鉱業部門での移民を奨励したため、ポーランドからの出稼ぎが急増する。戦間期にフランスへ移住したポーランド人はおよそ61万人、そのうち22万人はドイツのルール鉱山地方などからの再移住者で、本国から直接移住した者は40万人弱と推定される。

フランスのポロニアはさらに、第二次大戦中から戦後にかけてこの国に留まった者、または再移住した者10万人によって拡大する。

現在、ポロニアの規模を正確に示すフランス側の統計はないが、ポーランド外務省の推定ではおよそ90万人。一方、在仏ポーランド・カトリック教区と連絡を保っている者は約40万人で、教会筋によれば、この数はポロニア全体の30～40%にあたるという。

3-4. ドイツ

ポーランドからドイツへの移住は普仏戦争(1870-1871)が終わり、ドイツ帝国が成立した頃始まる。この頃の移民はもっぱらプロイセン支配下のポーランド住民で、したがって形式的にはこれは国内移住であった。移住先はノルトラインヴェストファーレン、ベルリンとその周辺、ザクセンなど。とりわけ移民が集中していたのはルール鉱山地方で、第一次大戦前におよそ50万のポーランド人労働者が働いていたとされる。ただし、そのうち10~15万人は、ポーランド人としての民族意識が不透明なマズールィ地方の出身者だった。

戦間期には3つの動きが指摘できる。まず前節で触れたように、ルール鉱山地方に定住していたポーランド人の一部がフランスへ再移住している。次に、独立を回復したポーランドへ帰国した人たちがいる。さらに、ドイツ帝国の東部から西部への移住が引き続き行なわれたが(とくにヒトラー政権成立以後)、この移動の主流はドイツ人で、ポーランド人の場合は永住目的より、短期・季節労働者の移住が多かった。

第二次大戦中のドイツにはおよそ250万人のポーランド国民がいたと推定される。戦後、ポーランド人の多くは本国へ引き揚げたが、一部の人は欧州諸国、北米、南米、豪州などへ移住する道を選択した。

西ドイツが戦後の混乱から脱してめざましい経済復興を遂げ、国民の生活水準がポーランドを凌ぐほどになると、他方では東西の冷戦が終息に向かう状況を背景に、ポーランドからドイツへ出国する者が急増する。この動きは本来、ポーランド国内のドイツ系住民を対象に、戦争で引き裂かれた家族の結合を目的として、両国政府の協定に基づいて行なわれた移住であった。しかし年とともに、出国者の中にドイツ人であることが疑わしい者が増えていった。事実、1956~1981年に正規の手続きを経て出国した60万人の中には、移住後、ドイツのポロニア団体のメンバーになった者も少なくないという。

こうした事情も絡んで、ドイツ側の統計からポーランド人の数を推定するのは難しい。ポーランド外務省の概算では、旧西ドイツ地域におけるポロニアの規模はおよそ60万人である。

3-5. ブラジル

ブラジルのポロニアは1860年代の末に、プロイセン領ポーランドからやってきた移民に遡る。その後、他の2つの分割領からの移民も加わって、1890年代の初めと1910年代の初めに、「ブラジル熱」と呼ばれた移民ブームのピークが訪れる。移民の数は第一次大戦前までにおよそ11万5千人、戦間期にさらに4万人が増加。現在のポロニアの規模を示すブラジル側の資料はないが、40~45万人と推定される。

3-6. カナダ

カナダへの最初の集団移民は、1850年代末から1860年代初めにかけて、プロイセン領カシュプ地方から移住した人々である。1890年代にはロシア領やオーストリア領からの移民も加わり、その数は第一次大戦前までに約10万人に達する。

戦間期には、アメリカによる移民制限政策の余波で、カナダへの移民が増大する。ポーランド側のデータによれば、1918～1939年間のカナダへの出国者はおよそ14万人だが（内訳はウクライナ人50%、ポーランド人35%、ほかにユダヤ人など）、研究者はこの数字はあまりに小さく、実際には35万人程度と推定している。

第二次大戦中と戦後、欧州各地からポーランド人難民の波が押し寄せた。移民当局の統計データによると、1946～1956年の11年間におよそ6万2千人。ポーランド人の流入はその後も続き、1957～1979年の23年間に3万3千人、1980～1986年の7年間に3万2千人が新たに入国した。

一方、1981年の人口調査によると民族的帰属 (ethnic origin) を問う質問にポーランドと答えた者は約25万4千人で、そのうち12万7千人、つまり2人に1人はポーランド語が母語と答えた。このほかに、ポーランドを含む複数の帰属民族 (multiple origin) を挙げた者が約15万人いた。したがって両者を合わせれば、カナダのポロニアはおよそ40万人の規模と推定できる。

3-7. イギリス

すでに2-4で述べたように、第二次大戦勃発の前までは、イギリスのポロニアは総数3千人ほどの小さな集団にすぎなかった。ところが戦時中、亡命政府がその本拠をパリからロンドンへ移した頃から、大陸から避難するポーランド人が急増し、その数は25万人に達する。しかし終戦後、一部は祖国へ引き揚げ、一部はアメリカ、カナダ、オーストラリアなど、主として英語圏の国々へ再移住した。その結果、イギリスに留まったポーランド人は、1951年の人口調査で16万2千人余りまで減る。

現在、イギリスのポロニアはポーランド外務省の推定でおよそ16万人。

3-8. オーストラリア

第二次大戦前にポーランドからオーストラリアへ渡った移民は少なく、1921年の人口調査でポーランド生まれと回答した者は1,784人、1933年の調査でも3,239人にすぎなかった。移民が急増するのは大戦後、それも1940年代の末頃からで、1947～1951年に6万人が入国した。

1986年に行なわれた調査によれば、ポーランド生まれと回答した者が67,676人いた。ところが、帰属民族 (ancestral origin) の欄の1番目にポーランドと記入した者119,766人中のポーラ

ンド生まれは56,919人だった。したがって、ポーランドで生まれた約1万の人々は、自分をポーランド人と同定しなかつことになる。ポロニアの規模としては、帰属民族の欄の2番目にポーランドを挙げた者(22,947人、そのうちポーランド生まれ432人)を加えて、およそ14万2千人と推定される。

3-9. チェコとスロヴァキア

チェコとスロヴァキアに住むポーランド人のほとんどは原住民の人々で、最大のポロニアはチェシン・シレジア地方にある。1921年に行なわれたチェコスロヴァキア側の調査によると、国境内のポーランド人は75,853人(内訳はチェシン・シレジア地方69,360人、モラヴィア2,800人、スロヴァキア6,059人)、1930年の調査では99,712人(チェコ92,689人、スロヴァキア7,023人)。しかし、これらの数字は、チェシン・シレジア地方だけで約10万の同胞がいると推定するポーランド側には、受け入れ難いものようである。

戦間期、第二次大戦中、戦後を通じて、基本的には移民による増減がなかった。にも関わらず、この国のポロニアは次第に縮小する傾向にある。これには政治的・社会的要因による原住ポーランド人の民族意識の変化が、明らかに関係していると思われる⁹⁾。

1984年末を調査時点とする公式統計によれば、チェコスロヴァキアのポーランド人はおよそ7万1千人(チェコ6万8千、スロヴァキア3千)である。

おわりに

前章で各国・地域別に見たポロニアの規模については、公的機関の人口調査に基づくものと推定によるものの違い、調査ないし推定の時期の違い、調査方法の違い(たとえば母語や帰属民族の尋ね方)などに大きな開きがあるので、早計な結論は慎まなければならない。しかしかりに各国・地域の現状を示す数字を単純に合計すれば、世界中のポロニアの総数は1,200万人にのぼる。さらにこのほかに、前章で挙がっていない他の欧米諸国、アジア、アフリカなどにも、小規模ながらポロニアが存在することを考慮しなければならない。いずれにしても、この数字をポーランド本国の人口3,760万人(1986年末現在)と比較するなら、ポロニアの規模がいかに大きなものであるかは容易に理解できよう。

しかしながら、ポロニアの規模だけが問題なのではない。重要なことはポロニアと本国ポーランドとの関係である。欧米諸国のポロニアと本国ポーランドとの往来は昔から盛んで、社会主義の時代にも途絶えることがなかった。とりわけ1989年の円卓会議以後、政治的・社会的変革、民主化、市場システムの導入による経済改革が進む中で、本国のポーランド人と世界各国のポロニアの人々との協力はあらゆる分野で活発になりつつある¹⁰⁾。他方、旧ソ連内のポロニア

には、本国との連絡を密にしながら、当該政府に少数民族として一定の自治を要求する動きも見られる¹¹⁾。東西のポロニア組織の交流も始まった¹²⁾。

さらに、筆者にとって興味深いのは、ポロニア内部の、ポロニアと本国ポーランドの間の、そしてポロニア同士の交流において、ポーランド語がどの程度使われているか、どのようなポーランド語が聞かれるのか、という問題である。各国・地域のポロニアで話されるポーランド語、いわゆる「ポロニア語 (język polonijny)」については、移住先の言語が母語に及ぼす影響や二言語併用の実態、標準文語の規範からの逸脱、あるいは移民の出身地の方言が保たれているか否かなどをテーマに、すでに興味深い研究が行なわれている。今後、ポロニアとポーランドの間の人と物の往来がますます盛んになれば、「ポロニア語」が本国のポーランド語に影響を及ぼしたり、外国語（たとえば英語）が「ポロニア語」を経て借用されるケースが出てくる可能性も否定できない。

本稿の目的は、ポロニアの過去と現在を略述することにあつた。筆者自身も含めて、ポーランドとポロニアの関係、ポーランド語と「ポロニア語」の関係に関心を抱く者の今後の研究に、多少とも資するところのあるを願って結びとしたい。

〈注〉

1)たとえばW.Doroszewski 編の *Słownik języka polskiego PWN*, I-XI, Warszawa, 1958-1969の"Polonia"の項 (VI s.893) には「ポーランドの国境の外に定住するポーランド人；ポーランド人居留地」という語義が与えられている。

2)たとえば *Encyklopedia powszechna PWN*, I-IV, Warszawa, 1973-1976の"Polonia"の項 (III s.576) 参照。この語はまた、さまざまな組織や団体の名称に使われてきた。ワルシャワに本部を置く「国外ポロニア連絡協会」Towarzystwo Łączności z Polonią Zagranicznąも"Polonia"を通称にしている。

3)本章の記述は数値を含め、主として文献(1)所収の9篇の論文に拠る。とくに2-1と2-2についてはJerzy Kozłowski: *Emigracja okresu schyłkowego Rzeczypospolitej szlacheckiej i porozbiorowa* (s.23-119), Andrzej Brożek: *Ruchy migracyjne z ziem polskich pod panowaniem pruskim w latach 1850-1918* (s.141-195), Krzysztof Groniowski: *Emigracja z ziem zaboru rosyjskiego* (s.196-251), および Andrzej Pilch: *Emigracja z ziem zaboru austriackiego* (s.252-325)を、2-3についてはHalina Janowska: *Emigracja z Polski w latach 1918-1939* (s.326-450)を、2-4についてはCzesław Łuczak: *Przemieszczenia ludności z Polski podczas drugiej wojny światowej* (s.451-483)を、2-5についてはAndrzej Pilch, Marian Zgórniak: *Emigracja po drugiej wojnie światowej* (s.484-511)を参考にした。

4)前掲 *Encyklopedia powszechna PWN*の"Emigracja polska po powstaniach narodowych"の項 (I s.700) 参照。

5)文献(1)7頁。

6)1940年初め頃、リトアニアとラトヴィアにいたポーランド系ユダヤ人の一部は日本へ向かった。文献(1)473, 480-481頁参照。

7)本章の記述は数値も含め、主として文献(2)所収のAndrzej Brożekの論文 *Liczebność ludności polskiej i pochodzenia polskiego w jej największych skupiskach osiedlenia* (s.51-67)に拠る。ポロニアの規模を示す概数は1970年代末から1980年代初めの頃の数字である。なお、旧ソ連に関するデータは同文献中の Zofia Kurz-

owa: *Język polski w ZSRR* (s.127-144) に拠った。

8) Gilbert Rappaport: *Sytuacja językowa Amerykanów polskiego pochodzenia w Teksasie*. 文献(2)161頁。

9) この問題については次の論文に詳しい。Janina Labocha: *Wpływ świadomości narodowej na język ludności polskiej Śląska Cieszyńskiego w Czechosłowacji*. 文献(2)145-157頁。

10) 1990年11月の大統領選挙は、ポーランドとポロニアの密接な関係を象徴する出来事だった。この選挙ではポーランド国籍を有する在外ポーランド人にも選挙権と被選挙権が与えられた(東京のポーランド大使館にも投票所が設置された)。第1回投票の結果、移民実業家のティミンスキ候補が23%の得票率でマゾヴィェツキ首相をおさえて2位になり、ヴァウエンサ候補との決選投票に臨んだ。また、当選したヴァウエンサ氏はロンドン亡命政府のカチヨロフスキ大統領から「ポーランド共和国大統領」の印章を引き継いだ。

11) リトアニアでは在リトアニア・ポーランド人連盟 *Związek Polaków na Litwie* が結成され、機関誌 *Nasza Gazeta* (我等の新聞) が発行されている。

12) たとえば1991年6月、ポーランド・カトリック教会の聖地チェンストホーヴァで第1回ポロニア医学世界会議が開催されたが、*Życie Warszawy* 紙(同年6月20日付)によれば、この会議には西欧、ソ連、アメリカ、カナダなどのポロニアから1,100人以上の医師および医学者が参加した。会議の名誉会長はヴァウエンサ大統領、会長はベレツキ首相(当時)で、開会に先立ってグレンプ首席大司教の司禱によるミサが執り行なわれた。

〈主要参考文献〉

(1) *Emigracja z ziem polskich w czasach nowożytnych i najnowszych (XVIII-XX w.)* Pod red. Andrzeja Pilcha. PWN Warszawa 1984

(2) *Język polski w świecie*. Zbiór studiów pod red. Władysława Miodunki. PWN Warszawa - Kraków 1990